

フ ォ ー ・ ア イ ズ

姿 な き 暗 殺 者

か ら の 脱 出

リアル脱出ゲームノベル

本書の読み方……………4

序章……………5

招かれざる依頼人……………9

ミステリアスレター……………19

社長令嬢と悩める少年……………53

クイズショウ……………

119

学園に忍び寄る魔の手……………

153

ゴートウヘブン……………

219

犬屋敷邸殺人事件……………

269

終章……………

341

本書の読み方

① まずは普通に小説を読み進めてください。

② 「ミステリアスレター」以降の章には、途中に設問（事件のポイント）が用意されています。
そこで手を止め、設問の答えを導いてから、ページをめくってください。

③ もし分からない場合、設問の次のページにヒント（真実への手がかり）があります。

④ 解決編で、設問の答え合わせをしましょう。

序 章

その女は、血の海の中で叫んだ。唸り声のようなその叫びは、言葉にならない彼女の心の泣き声だった。彼女の心は、つい数分前までここで繰り広げられた出来事を受け止め切れなかった。つらい、悲しい、悔しい、助けてほしい、助けて。心の中は言葉で埋め尽くされていたが、彼女はそれを上手く表現できなかった。ただ、叫ぶことでした。

桜の花が今にも蕾から顔を出そうとしている、二〇一九年三月二十六日。春の訪れの気配などどこ吹く風と、とても冷え込む夜。東京と埼玉の県境にある寂れた廃倉庫に一人閉じ込められた彼女は、冷たい床の上でうずくまっていた。廃倉庫の床を赤黒く染めている血は、彼女の白いワンピースにも飛び散り、赤いまだら模様を描き出す。この血は彼女のものではなく、つい先ほどまでここにいた探偵のものであった。

片目が義眼で元ヤクザ、そのくせ妙に頭が切れる、不思議な探偵。女が探偵と出会ったのは、ほんの一日前。この二日間、彼女はこれまでの人生で味わったことのない体験を数多くしてきた。迷える依頼人たちが探偵に持ち込む、一癖も二癖もある事件との遭遇。目的も正体も謎に包まれた連続猟奇殺人鬼との対峙と、いくつかの喪失。そんな二日間の結末が、こんな形で訪れることになるとは、一体誰が予想していただろうか。

叫び続けて声を枯らせた女は、ぼんやりと虚ろな目でうつむいていた。彼女にはもう、何かを考える力が残っていないかった。そもそも彼女にとって、考えることなど、必要のないことだった。大企業の社長令嬢として、何不自由ない暮らしを送った子供時代。父の会社で適当なポストに就き、さした

る仕事もなく遊び暮らす現在。与えられたものに従って生きていけば、困ることなど何もなかった。

女がすべてをあきらめかけたそのとき、彼女の頭の中で、探偵の言葉が響いた。

「よく見ろ。よく考えろ。考えることをやめたら、そこで終わりだ」

女は悔しかった。あの探偵には、馬鹿にされてばかりだった。このままここであきらめたら、また馬鹿にされる。意を決して彼女は顔を上げた。すると、廃倉庫の入口脇に落ちている茶色い革の手帳が視界に入った。

分厚くパンパンに膨れ上がり、数百ページはあろうかというその手帳は、あの探偵が愛用していたものだった。探偵は事件の情報を書き留めると言つて、ここ二日間、事あるごとに手帳に記録を書き込んでいた。あの手帳に何か重要な情報が書かれているかもしれない。彼女は血でべとついて動かしづらい手足を何とか持ち上げ、這うようにして入口の方へと向かった。

血の跡を作りながらゆつくりと進み、手帳の前までたどり着いた女は、倉庫の壁に手を押し当てて、手についた血を拭う。何度か繰り返した後に彼女は、手帳を手にとった。手帳はずしりとした重みがあり、ページは整った文字で埋め尽くされていた。

女はパラパラとページをめくり、中身を確認した。手帳には、探偵がこの事件に巻き込まれた三日前から、今日のつい数時間前までに発生した出来事が、事細かに書かれていた。行動を共にしてなかった間の内容は初めて知ることばかりであったが、それ以外の部分は彼女もよく覚えていて、めぼしい情報はなかった。

手がかりは何もないとあきらめかけたそのとき、女は手帳に一枚の紙が挟まっていることに気づいた。その紙には、探偵からのメッセージが書かれていた。メッセージに目を通した女の瞳に、わずかな光が灯る。そのメッセージは彼女にとつて、そして、探偵にとつて、最後の希望だった。

最後の希望を無駄にしないためにできることはただ一つ。探偵から指示された通り、この手帳をしっかりと読み、メッセージとともに書かれていた暗号を解くこと。女の顔にはもう、あきらめの色はなかった。彼女はこの二日間の怒涛のような出来事を頭に思い浮かべながら、手帳のページをゆつくりとめくりはじめた。

招かれざる
依頼人

二〇一九年三月二十四日（日） 十七時

東京のはずれにある雑居ビルの一室。北向きであり陽の差し込まないこの古びた部屋が、私の事務所だ。私はここで探偵事務所を経営している。まあ事務所といつても、探偵は自分一人しかないし、この事務所は自宅を兼ねている。奥の扉を入った先はただのしがない四十代独身男の寝室だ。つまり正直なところ、探偵といったってほとんど趣味みたいなものだ。

当然のことながら、この事務所に依頼が舞い込むことなどめつたにない。二〇一九年三月二十四日、午後五時。今日もまた何事もない一日が終わるのだと思つていたそのとき、事務所の外の階段をコツコツと上る音が聞こえた。どうやらお客のようだ。今日探すのは猫か、犬か、それともハムスターか。そんなことをぼんやりと考えながら待ち構えていたが、入ってきたのは予想だにしない人物だった。

「やあ、どうも。久しぶりだねえ……『探偵さん』……」

ノックもせずに扉を開けたその男と対面するのは、二十年ぶりだった。黒髪を綺麗にオールバックに整えて、高級スーツを着こなす飄々とした男。実年齢は恐らく五十代後半になろうかというところのはずだが、四十代前半といつても通用するほどの若々しさだった。

「江津さん？ どうして……」

「そんなに嫌な顔をしなくたっていいじゃないか。あんたと俺とは一緒に仕事をした仲だ」

「いや、仕事って……」

突然の来訪に動揺を隠し切れない私とは対照的に、彼はさも当然という様子で、ニヤニヤと笑っていた。彼の名前は、江津誠司^{せいじ}。友人同士で手軽にメッセージやかわいいスタンプを送り合える、今や生活に欠かせない国民的SNSの一つとなった「VINE」の創始者だ。電子機器メーカーの社長であった父親の資産を受け継ぎ、株式会社VINEを設立。自らが代表取締役社長となり、莫大な財産を築いた。何の工夫もない言い方をすれば、大富豪だ。私のような場末の探偵と、彼につながりがある理由。それは、私の過去にあった。

「何だい。俺のボディガードなんて、仕事じゃないってか……？」

「いや、そういうわけじゃ……ただ、私はもう足を洗ったんですよ。過去のことは……」

「分かってるよ。誰もが恐れるヤクザの若頭は今や、人々の悩みを解決する名探偵。泣けるねえ」

江津の言う通り、私は今でこそ足を洗ったが、長い間ヤクザとして暴力団に所属していた。その道に足を踏み入れたきっかけはちょうど三十年前、十三歳の頃。親から捨てられ施設で育った私は、中学に入る頃にはすっかりグレて学校にも行かず、毎日遊び歩いていた。そんなときに、当時組の若頭だった親分と出会った。施設や学校のつまらない日常に飽き飽きしていた私にとって、親分が見せてくれる世界は刺激的だった。どんなのめり込んで気づけば早十年。親分は小さいながらも組長に、私はその組の若頭にまでなった。

江津と仕事をしたのはたしか、私が若頭になってすぐのことだった。今でこそVINEの創始者として社会の評価も高い江津だが、当時は金持ちのボンボンの放蕩息子。江津の父は電子機器の設計・

開発で戦後一代で財を成した優秀な経営者だったが、彼はその父の金と権威を振りかざして遊び回るばかり。ただ遊び回るだけなら良かったのだが、やれ女に強引に手を出した、やれクラブで喧嘩したと、彼の周りにはトラブルが尽きなかった。

そんな彼のトラブルシューター兼ボディーガードとして雇われたのが、私だった。ボディーガードと言えは聞こえがいいが、要は単なる便利屋。表立って言えないような案件を暴力や金を使って解決する汚れ仕事だ。そんな仕事でも、実入りはいい。組のためだと私はずっとその仕事をこなしていた。「つていうか、あんた……随分とムシヨにいたんだって？ 道理で顔も見ないわけだ」

「なぜそれを……？」

「金持ちの力を舐めちゃいけないよ、探偵さん……？」

金持ちの力ではなく、金の力ではないかと指摘したかったが、すんでのところどとどまった。彼が言ったことは事実だ。江津の汚れ仕事をしていた頃から数年が経った、今から数えると約十八年前、私は敵対するヤクザの組長を撃ち殺した。その数日前に殺された親分の敵討ちだった。自らの殺人の罪が許される日が来るなどとは思っていない。ただ、愚かにもあのときの私は復讐心を抑えることはできなかった。今では、自分の行ったことを心の底から後悔している。

その一件で現行犯逮捕された私は、懲役十五年の実刑判決を受け、刑期満了まで務め上げた。出所したのは今から三年前。浦島太郎気分は、正直いまだに抜けていない。

「にしてもよ、何で探偵なんかやってるんだい、あんた？ こんな儲かりやしないだろう？」

「ええ、貯金は雀の涙ですよ。ただね、探偵をやれというのは恩人の勧めなもので……」

「へえ……そうかい」

江津は自分から聞いたくせに興味がなさそうにつぶやいた。恩人というのは、私を逮捕した刑事だ。親身になって更生を手助けしてくれた彼は、「お前は真実を見る目を持つている。だから探偵になつて人の役に立て」と私に言った。正直いくら人の役に立つたところで、殺人の罪が消えるわけでもない。十字架はずつと背負つていかなければならない。それでもなお、ひよつとしたら何か少しでも社会の役に立つことができれば、私にも存在意義があるかもしれない。そう考えて探偵をしている。あの種の自己満足だ。

「それで……一体どうしてわざわざ私のところへ？」

「探偵さんはせっかちだねえ……探偵さんも知つてゐるよね？ 『コレクター』のこと」

『コレクター』 って……あの、今話題の……？」

「そう。人を殺しては瞳をくり抜き集めてゐる連続猟奇殺人犯。あの『コレクター』だよ」

「それが江津さんと何の関係が？」

「勘が悪いなあ、探偵さん。コレクターの次のターゲットは、俺なんだよ」

江津は今までと変わらぬ調子で話しているように見せていたが、その声の調子には少し緊張が混ざるようになつていた。まさかその名前が出てくるとは。連続猟奇殺人犯コレクター。彼（彼女かもしれない）による最初の犯行が発生したのは、今からおよそ三ヶ月前のことだ。

最初の被害者は株式会社ハネダエレクトロニクス（はねだじえんこ）の辣腕女社長である羽田淳子。彼女はナイフでめつた刺しにされた状態で、自宅で発見された。左手の小指が切り落とされるなど、遺体は損傷が激しかったが、そんな損傷がかわいく見えるほどもつと大きな特徴が羽田の遺体には残されていた。左の眼球が無理矢理えぐり取られていたのだ。

現場に残された証拠は乏しく、警察の捜査は難航した。事件の数日前に羽田が会社の部下に対して悪質なパワハラを行っていたことが週刊誌に報じられていたことから、会社の従業員の中に犯人がいるのではないかというのが、警察や世間の見立てだった。また、パワハラ以外にも彼女には恨まれる理由があった。もともと小さな石油会社の社長だった彼女は、数年前に同じく決して大きくない中小電気企業の経営者であった羽田氏と結婚。その際に、彼のハネダエレクトロニクスに吸収される形で会社を合併。羽田氏は会長、彼女は社長の座についたが、この際に多くの従業員をリストラした。警察はパワハラとリストラの両面から恨みを持つ人間を探っていたが、数週間後、二件目の殺人が起きたことによつて、見立てが間違っていたことが明らかになる。

二件目の殺人の被害者は、SNSで話題を集める「Restaurant T・K」のオーナーにしてフレンチ料理人の美味仏蘭氏（びみふらん）。彼も同じくナイフでめつた刺しにされた状態で、自宅で発見された。そしてその遺体は、一件目と全く同じ手口で小指を切り取られ、左の眼球をえぐり取られていたのだった。警察やマスコミは一件目と二件目の被害者の共通点を調べ上げた。そしてある一つの事実に気づいた。それは、二人とも恨まれることの多い人物であり、また、殺害される直前に、何かの疑惑を持た

れていたということだった。一件目の羽田がパワハラを報じられていたのと同様、二件目の彼も殺害される数日前に、自らが経営する店で食品の産地偽装が行われているというリークがSNSで上がっていた。それにそもそも、美味仏蘭という明らかな芸名からも分かる通り、彼は名声やメディアでの露出にかなりこだわりの持った人物で、その尊大な態度やネット上での過剰な広告から、料理人や評論家の界限では決して好まれている人物ではなかった。

警察はこの二件の殺人を連続猟奇殺人事件と認定。黒い噂のある人物を殺しては、眼球を集めて回るこの奇妙な殺人犯はいつしか「コレクター」と呼ばれるようになっていった。

コレクターによる殺人はなおも続いた。三件目の被害者は、警視庁の要職を務めていた、遠藤悟えんどうさとしという男。ナイフでめった刺しにして小指を切り取り、左目をえぐり取る手口はこれまでと全く同じで、間違いなく同一犯によるものだった。そして他の二人と同様に、彼もまた、普段から恨みを買っていて、事件の直前に疑惑を持たれているという条件に該当する人物だった。都議会議員の娘の元に婿入り結婚して以来、義父の権力をほしいままにして人事に口を出しているという噂がまことしやかに囁かれるとともに、殺害の数日前には税金の不正利用を新聞にスクープされていたのだった。

「コレクターの次のターゲットが江津さん……？ どうしてそんなことが分かるんですか？」

「どうしてだなんて、そんなことはどうでもいいんだよ」

「そもそも、警察に行った方がいいんじゃないですか」

「とっくに行っちゃったよ！ だがな、あんなことは信用できねえ」

「いや……そんな……」

「俺が頼みたいことはただ一つ。あんたに俺の命を守ってほしいんだ」

私は何となく事の次第が見えてきたように感じていた。無理矢理はぐらかしていたが、きっと江津にはコレクターに狙われる心当たりがあるのだろう。他の三人と同様、何かしら表に出せないようなどす黒い秘密が。今では時代の寵児となった彼だが、昔の姿を知っている私からすれば、いくらか犯罪に手を染めていても何の驚きもない。普通の探偵ではなく、遠い昔に一度面識があるだけの私の事務所をわざわざ調べてやってきたのも、不都合なことを隠したままで依頼したかったからだろう。

「まったく、舐められたものですね……」

「何だ?!」

「今の私はあの頃とは違います。理由もロクに話さない、怪しい依頼人の依頼を受ける道理はない」

江津は一瞬かっとなったようだったが、すぐにもとの調子に戻り、皮肉たっぷりに言った。

「ふふふ……かっこいいねえ。でもさあ、探偵さん。いいのかなあそれで」

「はい……?」

「上手に隠してるみたいだけど……あんたの過去、この辺の人は知ってるの?」

江津の顔は意地悪に歪んでいた。私は嫌な予感がした。そして残念なことに、その予想は的中した。「あんたが元ヤクザだったこと……知ったらこの事務所に依頼人は来るのかなあ」

「江津さん……あなたね……」

「うまくごまかしてゐただけだ、あんたの過去は身体中に刻まれてゐるはずだ。そんな評判が広まったら、この事務所はやつていけるのかな？　探偵さん？」

江津はにやにやとしながら私の方を見つめていた。いくら成功しても、社長になろうとも、自分の思い通りに人を動かすことに快感を覚える彼の性格は昔から何一つ変わつていないようだ。

彼の脅しに屈するのは腹立たしいが、ヤクザだった頃の証が身体中に刻まれているというのは事実だ。よく見れば左目が義眼であることはすぐ分かるだろうし、顔にうつすら残る傷跡、首元に見え隠れする桜の刺青、手袋をした両手と、自分で言うのも何だがヤクザらしさはそこら中に残つてゐる。依頼人が先入観を持たずに接してくれている今でこそ、騙し騙し探偵としてやれているが、正直見た目はほぼヤクザだ。悪い噂を流されたらひとたまりもないことは目に見えている。

「はあ……分かりましたよ。あなたの依頼をお受けします。ただ……一つ条件があります」
「ああ……？」

江津は明らかに苛立つた様子で答えた。

「私はもうヤクザじゃない。犯罪に手を染めるつもりもないし、悪事を許すつもりもない」

「へっ……立派なことだ。どうぞご自由に」

「それで、詳しい依頼の内容ですが……」

「さつき言つた通り、コレクターの正体と居場所を突き止めて、俺の命を守ること。それが依頼だ」
江津は私の言葉を遮るようにしてまくし立てた。

「分かりました。ただ命を守るためにもいろいろと話しておきたいことがありますし……」

「ああもう、分かった。詳しい話は明日にさせてくれ。今日はこの後忙しいんだ」

「分かりました」

「まったく、昔は一言言えば動いてくれたのに、今は随分頭でっかちになったもんだなあ、探偵さんも」
私は江津の明らかな嫌味を聞き逃したふりをして無視した。頭でっかちとは随分な言いようだが、私の変化については江津の指摘もあながち間違いではないかもしれない。私はヤクザだった頃、何も考えずに感情だけに身を任せて行動を起こし、ついに殺人にまで至った。だからこそこれからは、私はずつと考え続ける。社会のことも、自分のことも、考えて考えて、考え続けて答えを出す。探偵になるときに、そう決めていたのだ。

江津は一方的に明日の待ち合わせ場所と時間をまくし立てると、足早に事務所を後にした。約束は明日の昼にVINEの本社ビルにて。私は事務所の看板に休業の札を立て、コレクターに関する事件資料をインターネット上で漁った。ある程度基礎的な情報は集まったが、インターネット上にある情報だけでは限りがある。私は渋谷を根城にしている馴染みの情報屋に連絡し、江津やVINE社に関する情報の収集を依頼した。これで恐らく明日には詳しい情報の連絡が入ることだろう。私は現在手に入っている分の情報がある程度まとめて準備を終えると、明日に備えて早めに休むことにした。

ミステリア
スレター

二〇一九年三月二十五日（月） 十時

会社員たちの通勤がある程度落ち着き、時刻はまもなく十時を回ろうかとしている頃、私は東京駅近くの高層ビル街の片隅にある、株式会社VINEの本社ビル、VINEツインタワービルへと向かっていた。外の天気はあいにくの雨。せつかくつきはじめていた桜のつぼみに何か恨みでもあるのかとばかり冷たい雨が降り注ぎ、三月とは思えないひんやりとした天気だった。

VINEツインタワービルはその名の通り、二つのタワーからなるオフィスビルだ。昨日までに調べた情報によれば、ビルの正面玄関と対峙したとき、左側に見える棟がL棟で、右側に見える棟がR棟。L棟の高層階からは東京タワーが、R棟の高層階からは東京スカイツリーが見えることが売りらしい。せつかくなら片方だけでなく、どちらの棟からも両方見えるように設計すればいいのに思ってしまう私の考えは、欲張りが過ぎるというものだろうか。

私はVINEツインタワービルまでの道中、マックスが集めてくれた情報に目を通していた。マックスは私の三十年来の協力者で、私のことをずっと支援してくれている老人だ。まるで外国人のような名前だが生粋の日本人で、出会った頃から「マックス」と呼ぶように指示されている。私が知っているのは、彼が元警察官だということ、そして、その情報網を使って数々の裏情報を集め、売買を行っている、今では裏社会の情報屋のようになっていくということ。詳しくは知らないが、警察からヤクザまで多種多様な人々と関係を持ち、情報を収集していると本人は以前話していた。

マックスから送られてきた情報は、江津誠司に関する情報をはじめとして今回も丁寧で詳しく、昨日打ち合わせして依頼したとは思えないほどにしつかりとまとまっていた。これがあれば今日の予定も問題なくこなせるはずだ。マックスは情報収集以外にもいくつか昨日から私のサポートを行ってくれている。私は彼が情報を送って来たメールに返信する形で、お礼と引き続きサポートを頼む旨の連絡を入れた。

そうこうしているうちに、駅から少し歩いた先にあるVINEツインタワービルに到着した。ビルの正面玄関を入って右に曲がり、R棟の受付へと向かう。ビルの外装は正直、東京都庁とほぼ変わらないあたりなものであったが、内部は打って変わって斬新だった。華美な装飾や、現代アートと思しき絵画、赤を基調にしたカラーリングなど、随所に前衛的な要素があり、良くも悪くも最先端IT企業という印象を受ける。

内装に気を取られつつも受付に到着すると、そこは広いホールのようなスペースになっていた。受付スペースは、七、八人の受付嬢がずらりと並ぶ大きな白いカウンタート、その周りを取り囲むように存在するカフェスペースとで構成されている。カフェスペースの方は、軽い打ち合わせや待ち合わせのために使われるものなのだろう。店内にちらほらと見える人影に、スーツ姿よりもカジュアルな姿が多いのは、さすがIT企業だ。

私はとりあえず、誰の応対もしていない受付嬢のもとへ向かった。

「いらつしやいませ」

「すみません。今日お約束している、谷典正たにのりまさという者なのですが」

「谷様ですね。少々お待ちください」

受付嬢はカウンター裏に置かれたPCを操作し、何か来訪者リストのようなものを確認している様子だった。

「お待たせいたしました」

「いえいえ。入ってよろしいでしょうか」

「あの、それがですね……すみません、ちよつとこちらにはお名前の記録がないようでした」

「え？」

平然とするように努めたが、私は内心驚きで胸が張り裂けそうだった。準備は万端に整えてきたし、昨日のやりとりを思い返せば入れないことはないはずだ。もちろん、大手を振って入れるような身分だとは言えないが……どこかで何かミスがあつたのだろうか。

「ちよつとこちらで確認してみます。大変申し訳ないのですが、どんなお約束か教えていただけますか」
すべてを包み隠さず話すのには、都合の悪い部分も多い。私は昨日打ち合わせでどのように決めたか思い出しつつ、適度に言い繕いながら受付嬢に説明をした。

「ありがとうございます。かしこまりました。その内容で確認いたします」

「分かりました。よろしくお願いします」

私がある場で待とうとすると、受付嬢は少し申し訳なさそうに付け加えた。

「すみません、ちょっと確認にお時間がかかりそうでした……確認が取れましたらお電話させていただきますので、携帯電話の番号をいただいてもよろしいでしょうか」

「あ、この辺りで待っていますよ」

「そうですね。ただ、どうしても規則で決まっております、大変申し訳ありません……」

彼女が悪いわけではないのだから、受付嬢はとても丁寧に頭を下げながら言った。私は一瞬ためらったが、あまりに申し訳そうな彼女の頼みをむげにはできない。

「大丈夫ですよ。分かりました」

私は胸元からメモを取り出し、自分の携帯の番号をさつと走り書きして受付嬢に手渡した。

「頂戴します。では申し訳ありませんが、もうしばらくお待ちください」

私は受付嬢に一礼すると、カフェスペースの方に向かった。何か問題が起きていない限り、恐らく短時間で確認は取れるだろう。ひよつとするとコーヒーを飲んでいるほどの時間の余裕はないかもしれないが、それならそれで問題ない。むしろ何か起きていた際にゆつくり考えられるように、一度腰を落ち着けておきたかった。

カフェに入ると、私は店内奥の角の席に案内された。客の入りはまばらで、周囲の席には誰も座っておらず、ゆつたりと過ごせそうな場所だった。

「お客様、ご注文はお決まりでしょうか？」

メニューを見ると、ほどなくして店員が注文を取りに来た。店員は若くて整った顔立ちをした

女性だったが、顔色が妙に青白く見えた。私がコーヒーを一つ注文すると、彼女は小さな声で「かしこまりました」とつぶやき、少しよろついた足取りで下がっていった。足元がおぼつかず、あまりに弱々しい様子に若干の不自然さを感じたものの、私は一度忘れて今考えるべきことに対処しようと努めた。気がかりなことはただ一つ。どうして問題なく会社の中に入ることができなかったのか。昨日のやりとりをいくら思い返せど、自分にミスがあったようには思えない。打ち合わせ通りに受付に行つたのだから、特に問題なく社内に入れていいはずなのだ。

おおかた受付嬢が何かを勘違いしているといったところなのだろうが、念には念を入れておくに越したことはない。軽く連絡を入れておくために、私は携帯と長年愛用している手帳を取り出した。この手帳は中身がバインダー型になっていて、紙の枚数を自由に増減させられるのが便利なのだ。茶色い表紙に取り付けられたベルトのボタンを外し、手帳に記してある昨日の打ち合わせ内容を確認する。今の状況の報告、昨日打ち合わせで話した通りで問題ないのか、何かトラブルが起きているなら教えしてほしいという内容のメールを送り終えたそのとき、先ほどの女性店員がコーヒーを持って戻ってきた。「ホットコーヒーです」

「ありがとう」

彼女がカップをテーブルに置こうとした瞬間、事件は起きた。まるで魔法にでもかかったかのよう
に彼女の体から力が抜け、ぼたりと私の方へと倒れ込んだのだった。

「大丈夫ですか!？」

「あ、すみません……ちよつと寝不足で貧血で……」

床に倒れそうになる彼女を何とか支えながら、私は彼女をよく観察した。どうやら寝不足で貧血というのは本当のようで、目の周りには青白いクマがしっかりと刻まれていた。

「わ、ごめんなさい……コートにシミが……べ……弁償します……」

尋常ではないほどあわてた様子の彼女の言葉を聞いて、私は自分のコートを確認した。たしかに彼女が倒れた際にコーヒーがこぼれて、少しシミができてしまったようだが、たいして目立つものでもない。それよりも彼女がここまで焦っているのは、恐らく私のことを筋ものの客だと思っているからだろう。その証拠に、彼女の瞳は私の左目の義眼や顔の傷、首元、手袋をしていても小指がないと分かる左手を次から次へと眺めては、その表情がどんどんと青ざめていく。

私は怖がられないように、なるべくにこやかに告げた。

「大丈夫ですよ。幸いにも黒いコートで、目立ちませんから」

私の声色が想像よりも優しくったのか、その言葉を聞いた彼女は少し落ち着いた様子だった。私はふと、受付の問い合わせを待つ間の暇つぶし程度に、先ほど気になっていたことを彼女に尋ねてみることにした。特に深い意味のない、ほんの好奇心からの行動だった。

「ところで……それより私は、あなたのことが心配です」

「え……？」

彼女は突然の展開に驚きの声を上げていたが、私は構わず優しい調子で続けた。

「あなたは先ほど注文を取りに来てくれたときも足元がおぼつかなかった。それに、そんなクマがでるほどの寝不足。コーヒーを出すことすら苦勞する寝不足なんて、めったにないことのはずだ」

「それは……」

「ひよつとして、今あなたには何か心配事があるんじゃないですか？」

「え、あなたは一体……？」

彼女は私のことを怪訝そうに見つめていた。突然こんなことを言つて怖がられるのは無理もない。私は彼女の信頼を得るためにも、とにかく明るくにこやかに告げた。

「ああ。突然すみません。怖がらせるつもりはないんです。といっても、こんな見た目じゃそれだけで怖いかもしれません」

「あ、いえ、そんなつもりじゃ……」

全身をチラチラと見ていたことに気づかれたと思つてか、彼女は少しばつの悪そうな表情になった。「いいんです。慣れつこですから。私が逆の立場だつて気になりますよ」

「本当に……すみません……」

「大丈夫ですつて。私は探偵をやつていて、谷典正と申します」

彼女は一体何に困っているのか。気になりはじめると私の好奇心は止まらなかつた。ここで探偵と名乗つてしまうことに一抹の不安はありながらも、私はそのまま会話を続けた。

「何かお困り事があるなら、ご相談に乗りますよ？」

「探偵さん、ですか……そうなんですね……」

彼女は私のことを値踏みするようにじつと見つめながら、何かを考え込むようにしていた。すぐに私の誘いを断らない様子を見るに、彼女に何か困っていることがあるのは間違いない。だがどうやらまだ私のことを信頼し切つてはいないようだ。私はダメ押しの一打を加えることにした。

「内緒ですが、実は私はここの社長の江津さんから依頼を受けていましたね」

「え？ 江津さんから？」

彼女はとびきり驚いた顔をして言った。江津の名前まで出してしまうのはなかなかリスキーな気もしたが、気になるという欲求にはあらがえなかった。それに、誰が何を知っているかは分からないのだから、情報は集めておくに越したことはない。思わぬところから有益な情報が手に入る可能性もある。時間が余っている今、ここで彼女の話を聞いておいて損になることはないだろう。

「すごい方なんですネ。じゃあ、お言葉に甘えて……」

どうやら江津の名前は彼女にとってかなりの効果があつたようだ。一体どんな話が飛び出すのかと身構えたが、彼女の悩みは何とも奇妙なものだった。

「実は先日、友人から手紙が届いたんです」

「手紙、ですか？」

「はい。何だか、その手紙がちよつと不思議で……」

「というところ？」

彼女は他の店員の視線を気にしながらも、こそそと私に経緯を話しはじめた。

「実は……あ、そもそも自己紹介がまだですよね。私は木根千鶴きねちづるといいます。普段は大学に通つて、バイトとして数ヶ月前からこのカフェで働いています」

「千鶴さん、よろしいですか？」

「はい。あ、あの……申し訳ないんですが、座つてもいいですか……？」

彼女は店内を見回しながら尋ねた。このまますっと立ち話をしているのはたしかに不自然だ。私が頷くと彼女は私の隣の席に腰を下ろし、堰を切ったように話しはじめた。

「先日届いた手紙の差出人は、私の友人で同い年のナオミ。彼女とは高校時代に知り合ったんですが、遠くに暮らしていることもあつて、あまり連絡は取っていませんでした」

「突然の手紙、ですか。たしかにこの時代に珍しいですが、それ自体は別に不思議ではないですよね」

「ええ。ただの手紙ならいいんです。でもそうじゃなくて……」

「一体何が書かれていたんですか？」

VINE社や江津に関わる話でないことを少し残念に思いつつも、私は彼女が受け取ったというその手紙が俄然気になり出してた。寝不足になるほど不思議な手紙とは一体どんなものなのか……私が考えを巡らせていると、千鶴はズボンのポケットから一枚の葉書を取り出した。

「これが、彼女から送られてきた葉書です」

「ありがとうございます。拝見します」

葉書の表面には差出人や宛先が記されていた。手書きで書かれていて、私には少し読むのが大変だったが、特に奇妙なところはない。一体何を悩むことがあるのかと裏面をめくったとき、その理由を理解した。たしかにこれは不思議だ。そこには模様や記号、イラストばかりが記されていたのだ。

「これは？」

「スケルトンパズルです。イラストを言葉にして、クロスワードの要領で枠の中に入れていくんです」
「お詳しいですね」

「あ、普通知らないですよ。実は私もナオミもパズル好きで、高校時代はそれで意気投合したんです」
「なるほど、そうでしたか」

「ただそれにしても、突然パズルだけ送りつけてくるだなんて……」

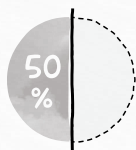
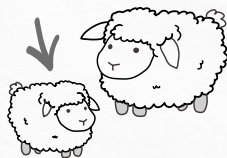
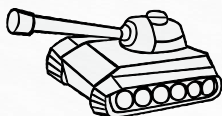
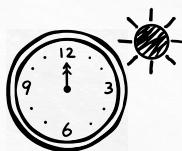
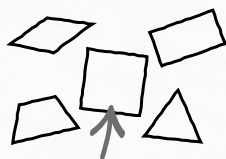
いくらパズル好きだといっても、数年間連絡を取っていない友人への久しぶりの連絡がスケルトンパズルだけとは、たしかに奇妙だ。ナオミは一体どうしてそんなことをしようと思ったのだろうか。

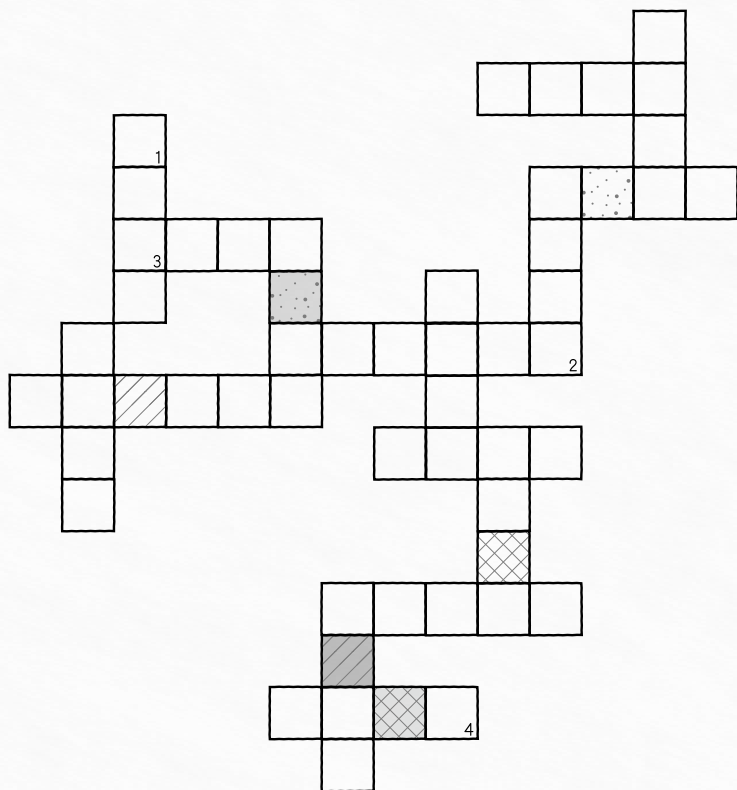
「ちよつと……とりあえず解いてみていただけませんか？」

「えつと……一番左上のイラストは『作物』を表していて、その隣のイラストは『治療』を表しているという感じですよね」

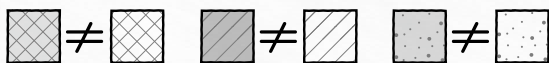
「ええ。単語が分からなかったら私に聞いてください」

彼女の言う通り、私はとりあえず解いてみることにした（次ページ参照）。





Hint



Answer



「え？ この答えは一体……？」

「そうなんです……私もどうして彼女がこんなことを書いてきたのかが不思議で……」

私は学生時代の知識を総動員し、何度か彼女に助けを求めながらパズルを解き終えた。出てきた答えはたしかに何とも不可解なものであったが、これだけでは何も判断することができない。

「実は、送られてきたのはこの葉書だけじゃなかったんです」

「というと、他にも何か送られてきたと」

「ええ、葉書が届いた後すぐ、これも彼女から届いたんです。これ……読めますか……？」

彼女が差し出してきたのは、使い古された小さな冊子だった。中は決して綺麗とは言えない走り書きの文字でびっしりと埋め尽くされている。どうやら誰かの日記のようだ。

「すらすらと読むのは難しいですが……日付が書かれているということは、日記ですよね」

「ええ、恐らく今ナオミと一緒にいる男性の日記だと思います」

「千鶴さんはすでに読まれたんですね。どんな内容なのか読んで聞かせてもらってもいいですか？」

「ええ。全部読むのはなかなか大変ですものね。分かりました」

千鶴は冊子の最初のページを開くと、ゆっくりとその内容を朗読しはじめた。「俺は、その瞬間彼女に一目惚れした」という書き出しで始まるその文章は、ここ一年ほどの出来事を綴った、ある男の日記だった……。

ある男の日記

六月十七日

俺は、その瞬間彼女に一目惚れした。深夜二時の地下鉄のホーム。仕事終わりで疲れていた俺の目には、真っ白い肌でほっそりとした彼女の姿が、まるで美しい百合の花のように見えた。俺は何としても彼女を手に入れたと思った。何か理由をつけて彼女に声をかければ良かったが、気恥ずかしくてそんなことはできなかった。俺にもう少し勇気があれば……もし万が一彼女にもう一度出会うことがあったら、必ず声をかけよう。俺の胸は、今いつになく高まっている。これがきつと、恋というものなのだろう。

八月三十日

何と幸運なことだろう！ 地下鉄のホームで、例の彼女にまた出会うことができた。しかもとんでもないおまけ付きだ。俺が彼女と出会ったのは、前回と同じ深夜二時。俺は前回の反省を生かして、声をかけるべく彼女に近づいた。しかし、俺の恋はそう簡単には実らなかった。彼女に近づいたその瞬間、駅に住み着いた浮浪者が突然叫び出し、俺はついそちらの方に目をやった。

そして、俺が目に戻すと、彼女はもうどこかに消えてしまっていた。運命の神様とは何と意地悪なのか……俺がそんなことを思っていると、ふと道にあるものが落ちていることに気づいた。それは、彼女の財布だった。恐らく、浮浪者に驚いて急ぎ足に電車に乗った彼女は、つい財布を落としてしまったのだろう。俺は運命の神様に謝罪した。あなたは意地悪などではなく、とても優しい神様だ、と。

財布の中身を確認したところ、彼女は大学に通う二十歳の大学生。名前は「ナオミ」というらしい。「ナオミ」とは何と綺麗な名前だろうか。財布の中には、彼女が友人と撮ったとみられる顔写真も入っていた。ナオミはその写真でも異彩を放つ美しさだった。友人の顔つきはまだ幼く子供っぽかったが、彼女だけは凛々しく、大人の女性の美しさを備えていたのだ。義務教育を終えてまだ二、三年だとは思えない垢抜けた姿だ。

この財布さえあれば、俺はいつでも堂々と彼女に声をかけることができる。なくしていた財布を見つけてくれた男なんて、まるでドラマの出会いのようではないか。声をかけるきっかけがなくてあれほど困っていたのが嘘のようだ。この財布をうまく使って彼女に近づき、彼女と仲良くなる。これは、学歴もなければ見た目も良くない俺に与えられた一世一代のチャンスだ。この恋だけは何としても実らせる。そのためにはどんな努力も惜しまないと俺は自分に誓った。

十一月二十六日

長年の夢が叶う日というのは、こんな気持ちになるものなのか。少し時間はかかったが、ついに俺は彼女を手に入れた。俺のナオミへの恋は、今日ついに成就したのだ。思い返せば、財布を拾ったあの日からは随分な時間が経った。俺が彼女のもとに財布を返しに行ったのは、拾った翌日。俺と彼女が初めて言葉を交わしたあの瞬間は今でも忘れられない。俺が「これ、あなたのお財布ですよ？ この前駅で拾ったんです」と財布を差し出すと、彼女はパッと顔を輝かせて「ありがとう！」と叫んだ。さらに彼女は、財布が見つかった喜びのあまり、俺に熱いハグをしてくれた。彼女の髪からほのかに香った甘い香りは、今もありありと思い出すことができる。

きっと、あのハグの瞬間から、俺と彼女はもう結ばれる運命だったのだろう。あの日から今まで、ゆっくりゆっくりと彼女との距離を縮める過程の俺の地道な努力など、ここに書くような面白いものではない。とにかく大事なものは、今俺が彼女への恋を实らせたというその事実だ。

彼女は今、俺の車の後部座席で寝ている。俺はその愛らしい姿をじっと見つめながら、幸せを噛み締めた。車のハンドルを握る手が汗で濡れる。これは緊張なのだろうか。彼女と結ばれるために、細心の注意を払って今日の日のことを考えてきた。万一ここで交通事故やスピード違反でも起こしたら、すべては水の泡だ。この幸せを自分のものになりたい。その一心で俺は車を走らせた。家に到着し、俺は彼女をお姫様抱っこして部屋まで運んだ。彼女はずっと眠っていたから、起

こしてしまふのが忍びなかったのだ。こんな俺の優しさも、彼女に伝わっているといいなと思う。明日からはついに俺と彼女との幸せな生活が始まる。楽しみで夜も眠れない。

十一月二十七日

ああ、楽しい！ 俺は今日から彼女と一緒に暮らしはじめた。仕事を終えて家に帰ったら、ナオミがいる。家に帰ってきて、俺の部屋にいるナオミを見たときの感動は、一生忘れられないだろう。家に着いてから俺が自分の部屋にたどり着くまでにすることは、家のドアを開ける、家のドアを閉めて鍵をかける、玄関から廊下へ上がる、廊下を通じて自分の部屋へ入る、たったそれだけ。それだけのことがまるで無限の長さのように感じられるほど、今日仕事を終えて家に帰ってきた俺の胸は高鳴っていた。

俺が部屋に入ると、ナオミはうとうとと眠っていた。自分の家から俺の家に移動してきて疲れただろうから無理もない。俺がナオミの白い肌に触れると、ナオミはびくっとして目を覚ました。その一挙手一投足がかわいくて、俺は幸せを噛み締める。ナオミは俺の部屋が気になるのか、目を覚ますとキョロキョロと部屋の中を見回していた。それに、部屋の窓の方に近寄っては、何とか外の風景を見ようと試行錯誤する。俺の部屋の窓は高い位置の小窓しかないので、外を見ることはなかなか難しいのだけど、ナオミはきつと俺が暮らしてきたこの土地や部屋に興味があった

のだろう。自分の部屋をあれこれと見られるだなんて、人によっては決して自分の良いものではないのかもしれない。だが俺は、何だか彼女が俺のことを知ろうとしてくれているみたいでうれしくてたまらなかった。ナオミが俺の部屋にいるのは、まだやっぱりどうしても慣れない。こんな夢のようなことがあっていいのだろうか。

十一月二十九日

何てことだ！ この家に来てから昨日一昨日と、ナオミはしばらく食欲がなかったみたいで、ずっとご飯を食べてくれなかった。俺はそれが心配で彼女に何度も料理を作った。栄養のつくステーキやパスタ、炭酸飲料。体調が悪そうな彼女のためにいろいろと工夫を凝らしたものの、どれもこれも彼女の口には合わなかったみたいだ。

とはいえこのままずっと食べなかったら、栄養失調になってしまふ。俺は何としてもナオミにご飯を食べてほしくて、今日はちよつと無理やり食べてもらった。可哀想だったし、そんなことはしたくなかったけど、仕方がなかったんだ。ひよつとしたら俺の料理がまずいのがいけないのかも知れない。もっと料理の腕を磨くべきかもしれないと思った。

念願叶って俺とナオミは一緒に暮らすことができ、ナオミも今の生活にはきっと満足しているはずだ。今は環境の変化に慣れていないだけで、徐々に彼女が元気な姿を取り戻してくれると

信じている。まあどんな彼女であっても、俺は彼女のことを愛している。それが変わらなければいいのかもしれないが。

十二月二十四日

幸せとはきつと、今の俺を表すための言葉なのだ。ナオミと一緒に過ごすクリスマススイブは心の底から最高の一日だった。今日のことを書くのは恥ずかしくてたまらないが、どこかに記録を残しておきたいという気持ちは強い。今日の俺と彼女のデートの内容をこっそりここに記しておく。俺はまず彼女を車に乗せ、海へと向かった。彼女と一緒に外出するのは、久しぶりのことだった。彼女はやはりあまり食が喉を通らないようで、かなり痩せ細ってしまったが、それでも美しさは全く損なわれていない。助手席に美しい彼女が座っているというだけで、ハンドルを握る俺の心は踊った。

お昼過ぎには海に到着した。冬の海はとても美しかった。正面には青い海、右を向けば愛するナオミの姿、そんな最高の状況で車を走らせる海辺のドライブ。俺の人生の中で一番楽しいドライブと言っても過言ではないだろう。まあ、あまりに楽しいがために注意散漫で運転が疎かになっ

てしまい、左前方から来る対向車からクラクションを鳴らされてしまったりもしたのだが。

海辺のドライブの後は、スーパーで買い出しをし、家に帰って二人でクリスマスパーティーを開

いた。やはりナオミはあまり食事の手をつけず、俺は心配になったが、決して楽しんでいないわけではないはずだ。何といっても今日は、クリスマスイブであるとともに彼女の誕生日でもあるのだ！ 彼女は今日からお酒が飲める。俺たちは買っておいたシャンパンで乾杯し、彼女の誕生日を祝った。彼女は初めてのお酒にかなり躊躇を示していたが、俺が飲んでみると言う、ビクツと震えた後、怖がりつつもちゃんとお酒を飲んでくれた。一口飲んですぐに酔っ払ってしまったのか、頬を赤らめている彼女はとてもかわいらしかった。

三月四日

悩ましい。一体どうしたら良いのだろう。今日ナオミは、友達に葉書を出しておいてほしいと俺にお願いしてきた。その葉書に書かれていたのは、何やらバズルのようなもの。難しくて俺には解けなかったが、彼女は「あなたとの日々が幸せだと仲良しの女友達に伝えるためのものよ」と言っていた。彼女の言うことを信じるなら、そのまま送ってあげればいい。しかし、正直俺には手放しに信じるのができなかった。考えたくもないことだが、もしナオミが嘘をついていて送り先が本当は俺以外の男だったら……送った内容が俺との生活が嫌だと書かれたものだったら……一度不安になると疑心暗鬼は止まらない。この葉書を送るべきか、送らざるべきか。

三月十二日

ああ、何と寂しいことだろう。彼女との生活に終わりが近づいているのかもしれない。俺に内緒で、彼女が誰かに何かを送る準備をしている気配がする。彼女は一体何を送るつもりなのか。この前、彼女の言う通りに葉書を送ってあげたというのに、今回は俺に内緒で進めているだなんて、怪し過ぎる。ひょっとしたら俺に何かサプライズを仕掛けようとしているのだろうか。だとしたら、送らせてあげるべきなのかもしれない。

しかし、その考えが樂觀的に過ぎるという可能性もある。俺と彼女の生活はもう終わってしまったのだろうか。俺は、彼女と一緒に幸せに暮らしたただけなのに。一体俺の何がダメだったというのだ。彼女にはたくさんの愛を注いだのに……。

俺は彼女とこれからもずっと一緒にいたいと思っている。どうしたら彼女は俺のもとを去らないでくれるだろうか。彼女と俺の生活が永遠のものになるように、俺は覚悟を固めることにした。彼女と一生をともしする覚悟を。このままずっと一緒に暮らしていても、未来はないだろう。覚悟を持って、彼女と向き合う。彼女の笑顔を永遠のものにするのだ。きっと彼女も俺の覚悟を分かってくれて、俺と彼女の生活はこれからもずっとずっと続くはずだ……。

千鶴が日記の内容をすべて読み上げ終わると、私はすぐに口を開いた。

「これは……千鶴さん、一刻も早く警察に通報するべきです」

「やつぱり、探偵さんもそう思いますか……」

どうやら彼女もすでに気づいていたようだ。ナオミから送られてきた葉書と男の日記が示す驚くべき真実に……。

依頼人——木根千鶴^{きねちづる}

事件のポイント——ナオミのパズルの答えは？

事件のポイント二——「一刻も早く警察に通報しましょう」と千鶴に告げた理由は？

※真実への手がかりは次ページへ。

（重大な手がかりなのでどうしても分からないときに見ること）